

<原著論文>

主任保育士が抱える問題
——若い保育士指導における困難事例の分析より——

野田 さとみ*1

目次

1. はじめに
2. 方法
 2. 1. 対象
 2. 2. 分析方法
3. 結果および考察
 3. 1. 「困難事例」記述について
 3. 2. 「対応策」の記述について
4. まとめ

1. はじめに

近年、ますます保育所に求められる機能や役割が多様化し、保育をめぐる課題も複雑化している。それに伴い、保育士の職務も多様化し、組織としての質の向上に取り組むことが求められている。保育者としての成長過程は、これまで様々議論されてきたが(秋田, 2000)、2018年の保育所保育指針の改訂において、第5章「職員の資質向上」では「(2) 保育の質の向上に向けた組織的な取り組み」の中で、「それぞれの職位や職務内容等に応じて、各職員が必要な知識及び技能を身につけられるよう努めなければならない」とされ、職位により異なる役割を有していることが示された。これらを具現化するための策として厚生労働省は、「保育士等キャリアアップ研修の実施について」(2017)を通知し、全国の自治体はこれに基づき保育士のキャリアアップのための研修を実施することとなった。また、2020年3月には「保育所における自己評価ガイドライン」(厚生労働省, 2020)が改

*1 名古屋柳城女子大学

訂され、園長や主任など、組織の中における職位や職務内容に応じて、どのような役割や専門性が求められているかを理解し、必要な力を身に付けていくことが重要視されてきている。特に、保育の質の向上にあたっては、現場で直接保育士の指導に当たる役割となる主任保育士等のミドルリーダーへの期待が高まっている。

認可保育所の設置において、主任保育士の設置は必須のものではないが、多くの保育所では現場を統括する役割として、名称は様々ではあるが主任保育士が配置されているところが多い。保育におけるミドルリーダーに関する野澤らの調査によれば（2018）、認可保育所における主任保育者の平均年齢は 48.43 ± 7.81 歳、平均主任経験年数は 4.45 ± 5.28 年、現場経験年数は 24.63 ± 8.86 年で、幼稚園や小規模保育所など他の保育施設に比べて経験年数が長いという結果が示された。しかし近年の新設園の増加を受け、経験年数や年齢などについてはばらつきが拡大する傾向にあると考えられ、十分な保育経験がないまま主任等の指導的立場を担うケースも増えている。そのため、主任保育士が抱える問題についても、保育所の置かれる状況に伴い、多様化しているのではないかと考える。

そこで本研究では、主任保育士が「若い保育士に対して困難」と感じていること、その「対応策」として他者から得たアドバイスについて、記述内容を分析することを通して、主任保育士が抱えている問題を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

2.1. 対象

N市主任保育士研修（2019年11月実施）に参加した38名を対象とした。研修は、「若い保育士の対応に困った事例」を各自が持ち寄り、4~5名のグループで紹介したのち、グループ対応策を提案する形で実施した。その際に記録した「困難事例」と「対応策」の記述内容について、分析を行うこととした。

2.2. 分析方法

計量テキスト分析とは、計量的分析方法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析（content analysis）を行う方法である。本研究の分析には、計量テキスト分析を行うために開発されたフリーソフトウェアである KH Corder（ver. 3.Beta.04f）を用いた（樋口，2020）。分析手順は、提出された記録を表計算ソフト Excel に入力し電子化を行なった上で、「困難事例」「対応策」の各記述のテキストデータについて、頻出語の抽出、

共起ネットワークの作成を行なった。

3. 結果および考察

3.1. 「困難事例」記述について

「困難事例」については、38名の記述について分析を行なった。分析対象とした文章について、合計文章数は204文、総抽出語数は4835語、対象語数1,783語、異なり語数796語、使用語は603語であった。抽出語において出現回数が多いものから45語を選出した(表1)。出現回数が最も多かったのは「保育士」39回、次いで「自分」28回、「伝える」27回の順であった。

次に、頻出語45語の共起ネットワークを作成した(図1)。その結果、各語の関連については大きく7つのカテゴリーに分けられた。含まれる抽出語やその関係性から、7つのカテゴリー①～⑦の特徴については以下のように考えられた。①は「保育士」「伝える」「意見」「主任」などから、職員集団における立場やその中での意見のやり取りについての説明であると思われた。②は「自分」「保育」「良い」「経験」「本人」などから、若い保育士が自分の保育に対して強く考えを持っているもしくは持っていないことを問題視している記述であると思われた。③は「具体的」「伝わる」「時間」「話す」などが含まれることから、対象の保育士に対する伝え方を工夫するものうまいかないことに対する記述であると思われた。④は「クラス」「考える」「リーダー」などの単語から、担当クラスにおける連携を問題にしている記述であると思われた。⑤は「聞く」「担任」「前」「手伝う」「相談」などから、相談内容に対して援助を試みようとしている記述であると思われた。⑥は「行事」「声」が含まれることから、行事などにおける若い保育士が直面する問題に関する記述であると思われた。⑦は「分かる」「見る」「若い」が含まれることから、世代によるギャップに関する記述であると思われた。

これらの結果から「事例」の記述についてその特徴を考察すると、①職員集団における意見のやり取り、②若い保育士の考え、④担当クラスの連携、⑤相談内容と援助の試み、⑥行事の問題の5つは主に問題と感じている内容や状況に関するもの、③伝わりにくさ、⑦世代によるギャップの2項目については、解決を図ろうとするがうまくいかないことに関する内容と思われた。

表 1. 「困難事例」記述における頻出語

抽出語と出現回数									
保育士	39	子	13	前	9	時間	7	出る	6
自分	28	担任	12	行事	8	職員	7	準備	6
伝える	27	話す	12	手伝う	8	声	7	新人	6
思う	22	考える	11	多い	8	先輩	7	先生	6
言う	21	分かる	11	本人	8	伝わる	7	相談	6
子ども	18	意見	10	良い	8	リーダー	6	他	6
保育	17	見る	10	感じる	7	思い	6	怒る	6
クラス	15	困る	10	具体的	7	若い	6	入る	6
聞く	14	主任	10	経験	7	周り	6	発表	6

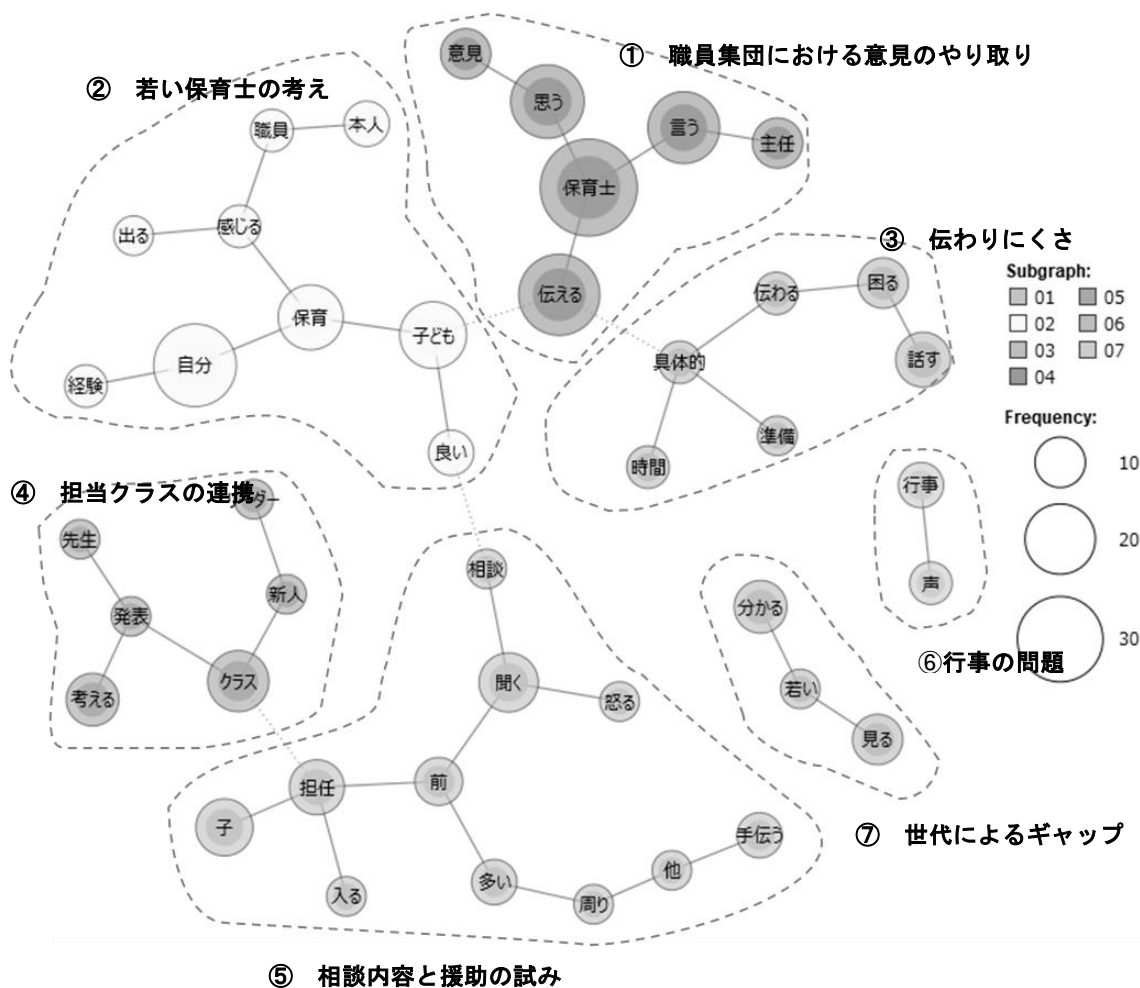


図 1. 「困難事例」記述における共起ネットワーク図

各カテゴリーの傾向について詳細に捉えるため、それぞれに含まれる動詞に注目した。①の「伝えるについて、前後に使用されている語を探るためにコロケーション統計を算出した（表 2）。スコアが高い語は上位から「繰り返す」「具体的」「多い」という順であり、

「繰り返す」「具体的」など、主任保育士が若い保育士への対応方法を説明するために使用されていたと考えられた。②の「感じる」、③の「伝わる」、④の「考える」、⑤の「聞く」、⑦の「分かる」のコロケーション統計を算出した結果、すべて否定語が上位であった。その中で「伝わる」「分かる」のコロケーション統計を表 3・4 に示す。「伝わる」については上位 3 語、「分かる」については上位 2 語がすべて否定語であり、「伝わらない」「分からない」の意味で使用されていることが分かった。これらのことから、特に③伝わりにくさ、⑦世代によるギャップに記されている内容に、コミュニケーションを取ろうとするが「伝わらない」「分からない」といった主任保育士の思いが反映されているのではないかと考えられた。

表 2. 「困難事例」記述における「伝える」のコロケーション統計

	抽出語	合計	左5	左4	左3	左2	左1	右1	右2	右3	右4	右5	スコア
1	繰り返す	2	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	2.000
2	具体的	4	0	1	0	3	0	0	0	0	0	0	1.750
3	多い	3	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0.650

表 3. 「困難事例」記述における「伝わる」のコロケーション統計

	抽出語	合計	左5	左4	左3	左2	左1	右1	右2	右3	右4	右5	スコア
1	ない	6	0	0	1	1	0	1	0	3	0	0	2.833
2	ぬ	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2.000
3	にくい	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1.000

表 4. 「困難事例」記述における「分かる」のコロケーション統計

	抽出語	合計	左5	左4	左3	左2	左1	右1	右2	右3	右4	右5	スコア
1	ない	14	0	1	1	2	0	6	0	1	1	2	8.567
2	にくい	2	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2.000
3	やすい	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1.000

3.2. 「対応策」の記述について

「対応」については、30 名より得られた記述の分析を行なった。分析対象とした文章について、合計文章数は 66 文、総抽出語数は 1058 語、対象語数 423 語、異なり語数 313 語、使用語は 213 語であった。抽出語において、出現回数が多いものから 30 語を表 5 に

示す。出現回数が最も多かったのは「伝える」で11回、次いで「良い」が10回、「考える」・「自分」が8回という順であった。

次に、頻出語30語の共起ネットワークを作成した(図2)。その結果、各語の関連については大きく6つのカテゴリーに分けられた。含まれる抽出語やその関係性から、6つのカテゴリー①～⑥の特徴については、以下のように考えられた。①は「方法」「理解」「確認」で構成されることから、問題を理解し確認しようとしている記述であると思われた。②は「自分」「良い」「本人」「受け止める」などで構成されていることから、若い保育士を受け止め受容しようとする記述であると思われた。③は「思う」「反省」「気づく」などで構成されていることから、問題が起こっている状況を把握しようとしている記述であると思われた。④は「考える」「一緒」「作る」などで構成されていることから、若い保育士に寄り添いともに考えようとすることを示す記述であると考えられた。⑤は「必要」「相談」「タイプ」から構成されていることから、相手に合わせた対応に関する記述であると思われた。⑥は「伝える」「具体的」「やり方」などで構成されていることから、伝え方の工夫を説明する記述であると思われた。

これらの結果から、「対応策」の記述についてその特徴を考察すると、①問題の理解、③状況の把握の2つのカテゴリーについては、問題や状況を冷静に把握しようとする姿勢に関する記述であると思われた。②受容する姿勢、④寄り添いともに考える、⑤伝え方の工夫、⑥相手に合わせた対応の4つのカテゴリーについては、若い保育士を尊重した対応策を具体的に提案した内容であると思われた。

表5. 「対応策」記述における頻出語

抽出語と出現回数							
伝える	11	保育	5	タイプ	3	受け止める	3
良い	10	本人	5	感じる	3	場所	3
考える	8	確認	4	気づく	3	声	3
自分	8	子	4	子ども	3	相談	3
一緒	6	思う	4	思い	3	必要	3
作る	6	主任	4	持つ	3	方法	3
聞く	6	反省	4	若い	3	理解	3
具体的	5	やり方	3				

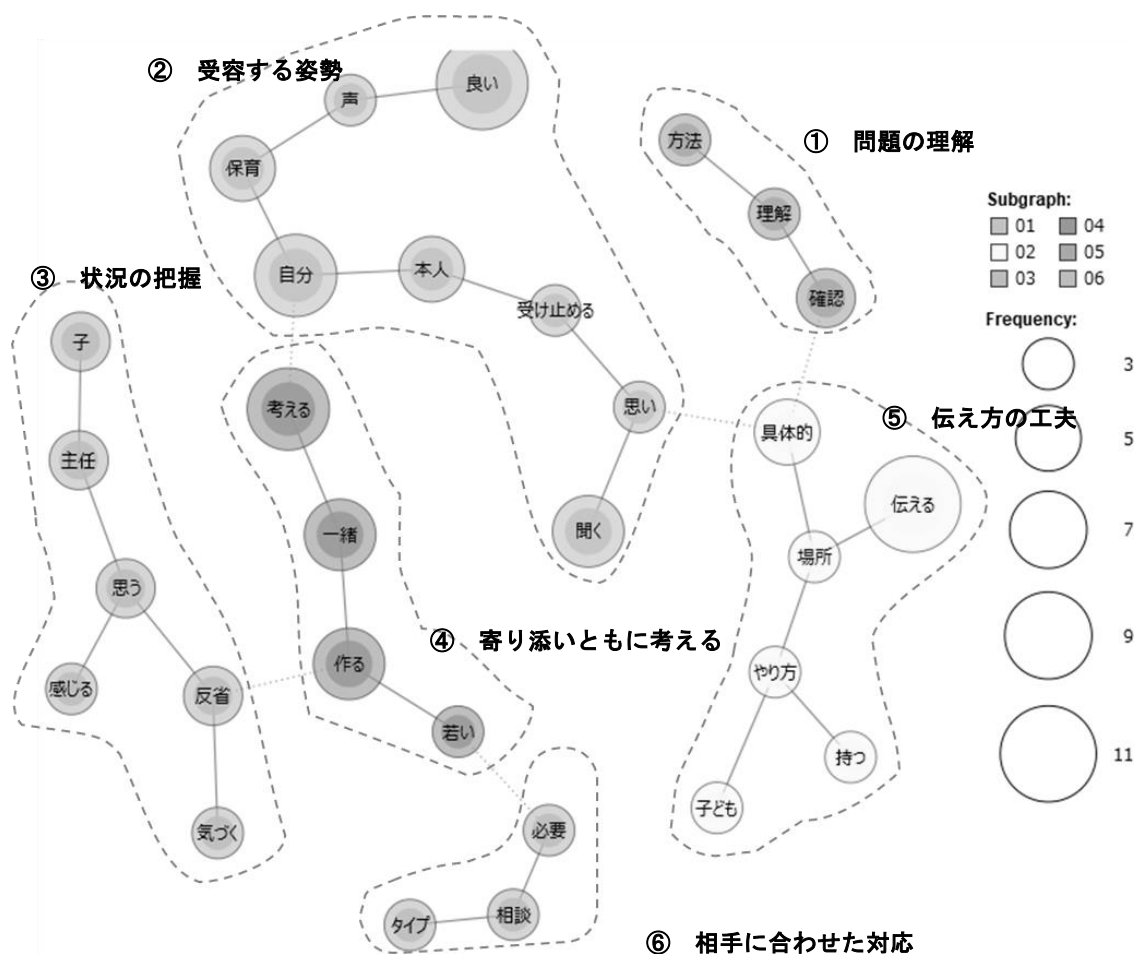


図2. 「対応策」記述における共起ネットワーク図

これらの傾向をより詳しく捉えるため、出現回数の上位の動詞「伝える」「考える」「作る」について、前後に使用されている語を探るためにコロケーション統計を算出した（表6、表7、表8）。「伝える」について、スコアが高い語は「ない」「繰り返す」「場合」「具体的」という順であった。「繰り返す」「具体的」などの前向きな提案がされており、「ない」についても使われ方は「伝えないといけない」というものであり、否定語であっても能動的な内容を示すものであった。「考える」について、スコアが高い語は「一緒に」「機会」「自分」であり、ともに考える機会を作ろうとする姿勢を示していると思われた。また、「作る」について、スコアが高かった語は「ぬ」「努力」「雰囲気」であり、やはり主任保育士が若い保育士と積極的にコミュニケーションをとろうとする姿勢を示す記述であった。

「対応策」の記述は、前項の「困難事例」で示された問題に対し、主任保育士間の話し合いで出された提案である。つまり、「伝わらない」「分からない」という思いに対し、「伝える方法」や「理解する方法」の具体案であったことが、①から⑦のカテゴリー全体を通

して見て取ることが出来た。この、「伝わらない」「分からない」という思いの中には、自分の新人時代からの変化に戸惑っていることも見て取れた。例えば、自分が新人の時には「自分から聞かなければ教えてもらえなかった」「主任や先輩にこんな態度は取れなかった」「もっと直接的に叱られた」などである。しかし、その思いを持ちつつも若い保育士の現状を受け止め、コミュニケーションをとるための工夫を凝らしている主任保育士の姿が、今回の分析から浮かび上がった。保育職におけるミドルリーダーの実態に関する研究（橋本ら，2020）において、ミドルリーダーに求められる資質・能力について「全体を把握する組織のまとめ役として、職員の連携やチームワークを高める役割が求められている」と、ミドルリーダー自身がと認識していることが示されている。本研究においても若い保育士を職員集団に取り込み、チームワークを高めることが主任の職務と捉えている意識が根底にあると思われた。

表 6. 「対応策」記述における「伝える」のコロケーション統計

	抽出語	合計	左5	左4	左3	左2	左1	右1	右2	右3	右4	右5	スコア
1	ない	2	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1.250
2	繰り返す	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1.000
3	場合	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1.000
4	具体的	2	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0.750

表 7. 「対応策」記述における「考える」のコロケーション統計

	抽出語	合計	左5	左4	左3	左2	左1	右1	右2	右3	右4	右5	スコア
1	一緒	3	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	1.500
2	機会	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1.000
3	自分	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1.000

表 8. 「対応策」記述における「作る」のコロケーション統計

	抽出語	合計	左5	左4	左3	左2	左1	右1	右2	右3	右4	右5	スコア
1	ぬ	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1.000
2	努力	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1.000
3	雰囲気	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1.000

4. まとめ

本研究では、主任保育士が若い保育士に対して問題を感じている「困難事例」と、その「対応策」として他者から得たアドバイスの記述について、計量テキスト分析から主任保

主任保育士が抱える問題

育士が抱えている問題を探ることを目的とした。その結果、主任保育士が問題と感じている事例には「伝わらない」「分からない」という若い保育士とのコミュニケーションに対する困難さが伴っていることが明らかとなった。その背景には、自分の新人時代とは保育士の育成に対する考え方、職員の年齢構成や職位の設置などの変化も影響していると思われる。今回の結果を受け、今後はコミュニケーションにおいて問題となる具体的な事例や、若い保育士の側が困難と感じる事例についても検討することが課題となる。

謝辞

貴重な記録を提供していただきました西尾市保育士の皆様に、深く感謝いたします。

引用・参考文献

- ・ 秋田 喜代美 (2000), 保育者のライフステージと危機 ―ステージモデルから読み解く専門性―(特集 保育者の成長と専門性), 発達 21(83), 48-52.
- ・ 厚生労働省雇用均等・児童家庭福祉局保育課(2017), 保育士のキャリアアップの仕組みの構築と処遇改善について.
- ・ 厚生労働省 (2020), 保育所における自己評価ガイドライン (2020年版).
- ・ 野澤 祥子・淀川 裕美・佐川 早季子・天野 美和子・宮田 まり子・秋田 喜代美 (2018), 保育におけるミドルリーダーの役割に関する研究と展望, 東京大学大学院教育学研究科紀要 (58), 387-416.
- ・ 樋口耕一 (2020), 「社会調査のための計量テキスト分析」, ナカニシヤ.
- ・ 橋本祐子・中橋美穂 (2021), 幼稚園・認定こども園におけるミドルリーダーの実態に関する研究―質問紙調査に対する私立園の回答分析から―, エデュケア, 41, 5-13.

要旨

The Problem Analysis that the Chief Nursery Teachers are worried about
training Young Nursery Teachers

Satomi NODA*1

保育の質の向上にあたっては、現場で直接保育士の指導に当たる役割となる主任保育士等のミドルリーダーへの期待が高まっている。本研究では、主任保育士が若い保育士に対して問題を感じている事例と、その対応策として他者から得たアドバイスの記述について、計量テキスト分析から主任保育士が抱えている問題を探ることを目的とした。「問題事例」の記述における頻出語及び共起ネットワークの結果から、7つのカテゴリーが示され、特に「伝わらない」「分からない」というコミュニケーションに関して問題を感じていることが示された。「対応策」の記述における頻出語及び共起ネットワークの結果からは6つのカテゴリーが示され、「問題事例」に対する解決策としての具体的なコミュニケーション方法が提示されていることがわかった。これらの結果から、主任保育士は自分の新人時代からの変化に戸惑いながらも、若い保育士の現状を受け止め、コミュニケーションをとるための工夫を凝らしている姿が浮かび上がった。

キーワード；主任保育士 若い保育士 問題事例 対応策 計量テキスト分析

*1 Nagoya Ryujo Women's University